

先日、参議院の決算委員会で、ある国会議員の自衛隊員に関する発言に、私は耳を疑いました。不適切極まりない発言であり、また、約22万人もの日本の自衛隊員をステレオタイプな価値観で一括りにし、組織を評価するという感覚を持った人物が、この国の国会議員であるという事実に愕然としました。震災発生以降、自衛隊の方々の献身的な活動を間近で見てきた町民の皆様も、同じ思いを抱かれた方が多いのではないのでしょうか。

2年半前の地震発生直後、私は当時の馳知事に2回、電話を入れています。1回目は家族と屋外に退避した際、「大変なことが起こりました」と伝えました。2回目は自宅から役場に向かう途中、庚申町付近の土砂崩れを目の当たりにし、「知事、自衛隊を要請してください」と。今思えば、今回のような大災害時には自衛隊が即座に出動する仕組みになっているようですが、当時はそこまで考えが至らず、直感的に「助けが必要だ」と感じたのだと思います。

震災当日の夜か翌日の朝方には、自衛隊の方々が災害対策本部に入ってくださいました。以降、人命救助活動や道路啓開、物資の輸送、入浴支援、被災者の見守り活動などに多大なるご尽力をいただきました。1月から2月にかけて本部に張り付いていただき、私は自衛隊員の皆様と時間を共にしました。椅子に座ったまま互いに仮眠を取る日々が続き、時には雑談を交わすこともありました。交代で来られる自衛隊員の方々が「穴水町のために何ができるか」「被災者の力になりたい」という熱い思いを胸に活動されていることは、隣にいてひしひしと伝わってきました。その後、5月に自衛隊が撤収される際のお見送り式では、深い感謝の思いとともに、一抹の寂しさと不安を感じながら見送ったことを記憶しています。

それだけに、今回の国会での発言は残念でなりません。自衛隊員の皆様の活動や誇りに支障が出ないことを、心から祈るばかりです。